

島崎藤村『春』論

—〈都会の人間〉考察—

蔡 永 姪

(2003年9月30日受理)

A Study on “*Haru*” of Toson Shimazaki
—An observation of Metropolitan Tokyoites—

Chae Young-nim

“*Haru*” depicts the urban life in modern Tokyo. The youths of the twenties of the Meiji era look forward to the coming of a new era with hopes and anticipation. Though caught in domestic entanglements peculiar to the old downtown of Tokyo, they somehow manage to proceed to the promising quarters of learning and enlightenment, so-called “Hongo” district which belongs to “Yamanote”. Among them a character who dares to leave Tokyo is featured and that suggests the author’s critical attitude toward modern Tokyo.

Key words: “*Haru*” of Toson Shimazaki, Tokyo in the Meiji era, “Shitamachi” (the old downtown Tokyo), “Yamanote” (the uptown of Tokyo), family

キーワード：島崎藤村の『春』，明治の東京，下町，山の手，家族

はじめに

島崎藤村が明治39年に発表したデビュー作，書下ろし長編小説『破戒』は信州飯山を舞台に被差別部落問題を扱い，大きな反響を呼び注目を集めた。その2年後には，東京が舞台の第2の長編小説『春』が，明治41年4月から8月まで「朝日新聞」の連載を経て明治42年10月に「緑蔭叢書」から自費出版された。

『春』は関西漂泊（明治26年2月1日～）を終えた島崎藤村が，東海道鈴川の宿で「文学界」誌の仲間である北村透谷・平田秃木・戸川秋骨と再開する明治26年7月22日から，仙台の東北学院に教師として赴任すべく東京を汽車で旅立つ明治29年9月上旬までの約3年間の実生活を素材にして描いている。とはいっても，例えば，北村透谷がモデルである青木像についても，〈事実を資料に即して正確に再現するというのではなく，実感を伝えるために資料を自由に駆使¹⁾〉，また，〈これらの改変は総じて現実には，散文的な時間しか流れていなかった過去の三年間を，いわば物語的時間に組み替えるための装置〉など²⁾，『春』に

付きまとっている私小説的な側面の相対化がなされている。

藤村文学と言えば，木曾，信州，あるいは仙台といったところの〈風土性〉が語られている。しかし，藪禎子氏は，藤村は71年の生涯のうち，約50年を東京で過ごしており，この点，漱石のような純粋な江戸っ子と違い，東京が〈特殊な経験〉として生まれる〈二重性そのものが藤村世界の構造に繋がっていく〉と指摘し，このような観点から，藤村の作家的出発となる最初の長編小説『破戒』では〈田舎を舞台とし，そこから日本を照射する³⁾〉という地点で成立した作品であると指摘している。『破戒』の成立に田舎の媒介があったことを知ることができるが，本稿で取り上げる『春』は東京を舞台にすることを意識的に行った作品であり，『春』執筆のための取材中に藤村はつぎのように語っている。

「破戒」には信州のローカル・カラーが現れてゐるといふ世間からの御批評を蒙りましたが，今度の「春」には都カラーとでもいつたやうな都会の人間

をかいて見るつもりです⁴⁾。(下線は引用者、以下同じ)

この談話には、多大な反響を呼んだ『破戒』が〈ローカル・カラー〉という批評を受けて、『春』では〈都カラー〉を意識した〈都会の人間〉を念頭に置いて、東京という都会を意識的な対象に据えていることが見て取れる。つまり、『春』では明治維新後近代化をなし遂げつつあった明治20年代の東京を舞台にした〈都会の人間〉を描く意図があり、その結果描かれる主軸は青年仲間の「家」の問題として展開されている。

本稿では、『春』執筆時期の明治40年前後の藤村の東京認識と、『春』に描かれた作品世界における〈都会の人間〉に注目して作品分析を試みる。

1. 藤村における明治40年前後の東京認識

明治14年に藤村が兄に連れられて上京後の約10年間の東京は、日本近代の本格的揺籃期であり、藤村にとっては自己形成期に当たる。上京後の藤村の住まいは、京橋から日本橋へと下町を移動する生活をしている。明治学院を卒業後、明治女学校の教師になるまで明治20年代半ばまでの実生活の歩みの特徴は、〈下町から山の手へないし知的文化圏へ〉という方向性が見られる⁵⁾。明治女学校の教師を辞めた直後から『春』の背景として取り込まれている藤村の明治20年代の実際の歩みと、明治40年前後の『春』執筆に当たって東京に向けられた眼差しは、どのようにリンクしているのだろうか。

『春』執筆時における藤村の近代都市東京に向けられた認識の一端を探るために、藤村と同時期の明治東京を生きた友人田山花袋の回想集である『東京の三十年』と、藤村の大正初期の「小山内薫氏の印象」(大正7年『新潮』11月号)、明治39年本格的に『春』執筆に入った時期に書かれた談話の「文学談」及びその補足としての「寒き口唇」を比較・検討する。ここから藤村の東京〈都会〉認識を探ることができると思われる。

1.1. 田山花袋の場合

『東京の三十年』は、花袋三度目の上京の年である明治19年から数えて東京での30年の生活を綴ったものである。ここには明治20年代以後、東京が大都会へと変貌を遂げていく過程を、大正7年を現在時点として語っている。

つぎの文章は「東京の発展」からの引用文である。ここでは、明治14年ごろからの回想に呼び起こされた

明治東京と大正初期のめざましい変化を「文明発展」の奇跡として捉えている。

この頃(大正6年現在——引用者注)の東京の発展は目覚ましいものであった。……中略……明治十四年代あたりの東京は?泥濘の路に円太郎馬車の駛った東京は?……中略……そしてそれが、尠くとも明治二十七、八年まで、そういう風であった。……中略……丸の内は、いやに陰気で、寂しい、荒涼とした、むしろ衰退した気分が満ちわたっていて、宮城も奥深く雲の中に鎖されているように思われた。何と言う相違であろう。今は濠の四周を軽快な電車が走り、自動車が飛び、おりおりは飛行機までやって来た。……中略……本郷の通りは概して幅広くなった。……中略……でも、下町、ことに日本橋の奥の方に行くと、今でも江戸の町の空気の残っているところがないでもない。……中略……そこらへ行くと、土蔵が連なって並んでいたり、大きな問屋があったりして、何となく三百年の江戸の繁華な跡を見るような気がする。……中略……二、三十年以上も時勢に後れた町の風景を見ることがある。……中略……江戸の空気は文明に圧されて、市の真中に、むしろ底の方に、微かに残っているのを見るばかりである⁶⁾。

泥濘の道を馬車が走る明治14年ごろ、丸の内までも陰気で荒涼としており、宮城は〈雲の中〉に包まれていた様子である。それが、大正6年現在は、濠の周囲に文明の利器である電車が、自動車が、飛行機まで飛翔し、文明の目覚ましい発展の感慨に胸打たれている。そして、田舎であった本郷の通りは一変している。これに比べて、日本橋の奥の方の〈下町〉は、依然と土蔵や問屋が並んでいる。そのような江戸の町はもはや、〈時勢に後れた〉風景でしかない。このように花袋は、濠の周囲の山の手が目覚ましい発展ぶりとは日本橋周辺の下町を対蹠的に捉えている。また、山の手については別の箇所ですぎのように捉えている。

今でも其処に(牛込市谷周辺——引用者注)行くと、いわゆる山の手の空気が私を堪らなくなつたく思わせる。……中略……山の手には、初めて世の中に出て行った人たちの生活、新しい不如意がちの、しかし明るい若い細君のいる家庭、今に豪くならなければならないという希望の充された生活、そういう気分が到る処で巴渦を巻いている。その証拠には、新世帯の安道具を売る店とか、牛肉の切売店とか、安い西洋料理とか、そういうものが際立って目に付くのが牛込の街の特色だ⁷⁾。

明治維新後、新しい参入者として山の手に住む人々の勢いが読める。明治の新しい時代を希望に満ちく世の中に出ていった人たちの生活〉が営まれる場所として、例えば、ここでは若い細君のいる新世帯の様子が捉えられている。花袋は、上京後牛込周辺に居住しており、慣れ親しんだ懐かしさという側面もあるが、新しい時代の価値を体現する場所として山の手を見ている。

1.2. 藤村の場合

藤村の実生活はすでに触れたように京橋、日本橋周辺の典型的な下町空間の中で、学びの場としての近代の学校と、生活の空間としての下町を往復していた。東京が、新しい近代都市に変貌するにつれ山の手が浮上するが、しかし都会の商業の中心は依然として明治期を通して京橋、日本橋が中心であり、山の手と下町には職業による住み分けが進行していた⁸⁾。藤村の上京後の生活は、住まいと学校という二重的空間を体験する生活であった。少年・青年期を送った生活の場としての下町経験は、東京という〈都会〉をどのように認識させているのだろうか。

大正7年に書かれた「小山内薫氏の印象」には東京〈都会〉に向けられた認識を伺うことができる。小山内薫氏と藤村の二人の関係は明治35年東京大学英文科に入学した学生的小山内が、詩人藤村への敬慕に燃えて明治35年12月長野県小諸の藤村を訪問したことから親交は始まる。つぎの引用文は、藤村が小山内薫の印象について語ったものである。そこには山の手と下町の二分された境界意識が見られる。

小山内薫氏は下町の人かと言ふに、私が初めて逢った頃（明治35年——引用者注）の小山内君は純然たる山の手の人であつた。この最初の印象は私には長く消えずに続いて来ている。小山内君は下町で育つた人ではなく、山の手から下町へ入つて行つた人だ。大学の図書館から真砂座や明治座の楽屋へ入つて行つた人だ。君が下町へ行くやうに成つたのは劇に志したのがその動機であつたらうと思ふ。君の「大川端」を読むと、山の手で修業を積んだアンテリジャンな青年が全く生い立ちを異にした下町の若い人達に寄せた情緒と悲哀とがあらわれて居る。（それを強く意識して書かれたか奈何かは別としても）……中略……しかし君は下町に居ても山の手を忘れない人だ。真砂座や明治座の楽屋の空気の中に身を置きながらも、近代劇の研究を怠らなかつた人だ。……中略……下町に於ける君の苦闘の歴史を知るものは少ない。私なぞは君が山の手時代からの長

い馴染ではあるし、一頃は浅草の瓦町と新片町と二三の横丁を隔てたぐらゐの近く住んで君の二階の書齋へもよく出掛けて行つて見たし……中略……全く『自由劇場』は山の手ばかりで興せる芝居でもなく、下町ばかりで出来る芝居では無論なかつた。それを結びつける迄に苦心したのが小山内君だ⁹⁾。

下町で「自由劇場」を通して活動している小山内薫は、一般的には下町の人として見られるという前提がある。しかし藤村は小山内薫を〈下町の人〉とは見ていない。なぜならば、小山内薫は東京大学で学んだ〈純然たる山の手の人〉として東京生活を出発しているからである。引用文に見られる〈大学の図書館〉〈アンテリジャンな青年〉〈山の手で修業を積んだ〉〈山の手時代〉が示すのは、この事実を踏まえた表現である。〈大学の図書館から真砂座や明治座の楽屋〉への歩み、すなわち〈山の手から下町へ入つた〉という経路は、下町から山の手へという一般的な方向とは逆向きである。この逆の歩みに対して藤村は「自由劇場」を例にとり、芝居と近代劇を〈結びつける〉努力に対して評価している。江戸と近代の繋ぎ目に藤村の目が向けられていることが確認できる。

明治39年3月、『破戒』の出版を終えた藤村は浅草新片町に引っ越し『春』の執筆に入る。ここに、朝日新聞の記者が訪ね、藤村に浅草に引越したのは〈下町研究〉のためかと問うている。「文学談」はこの質問の答えからはじまっている。まず記者の質問から伺えるのは、浅草=江戸趣味=〈下町研究〉という図式である。浅草に住むこと自体が〈下町研究〉として受け止められているのである。藤村は、その答えとして硯友社の下町に向けられた文学活動を踏まえながら答弁している。自分は〈江戸気質〉を解する硯友社の人々のように〈下町の風俗にホレて来た〉のではないとする。つまり、硯友社の下町に向けられた認識は、明治維新後の近代化に対するアンティテーゼとしての志向であるが、藤村はそのような反近代的な視線を下町に持ち込んでいるのではない。藤村にとって下町はつぎの引用文のように、もはや歴史的展望を喪失した〈廃残の地〉である。それに比べて、文明化は山の手の本郷・神田・麴町から、いまは久保・早稲田・青山の新開地にまで進んでいる。この文明化の現状を〈火事〉の勢いの広がりの比喩として展開している。

今の時代此辺は既に敗残の地ですね。是れを例へて見れば君の居る本郷とか、又神田、麴町辺は現在火事場で盛んに炎々と燃え上つて居る最中ですね。文明の焰は凡ゆるものを焼き尽くさねば止まぬと云

ふ勢で、以前私の居た大久保とか早稲田、青山辺は、其火事場の火の子が盛んに降つて来て果ては焔の紅い舌先が彼処此処の屋根を嘗め始めんとして居る様なもので、文明が漸々其辺にまで達せんとしつゝある処でせう。其れから此柳橋一帯の処は、もう火事が済んで仕舞つて、其燃え残りが処々に微かな煙を立てゝ居る位、火の気も漸やく消えんとして居る様なもの、文明の大勢は既に此地を過去に葬り去つて、在りし昔しの榮華を夢見つゝ惴々焉として、四方に逃げ去る潮流に追ひ付かんと、手を伸ばしても、既に遅い、滔々たる時代の潮流は寧ろ此地を益々端の方へ押し遣ると云ふ有様で、もう何の望みもない¹⁰⁾。

下町に関する予の談話は……中略……下町の江戸趣味が極度まで発達し尽し、山の手の田舎趣味が次第に変遷して来て、おのづから其間に「新東京」の発展しつゝあるのは今日の光景である。予が東京を火事場に誓へたのも其点で、主意は時代の精神もしくは好尚にあつた¹¹⁾。

藤村は、明治維新後近代都市化をなし遂げてきた東京を、引用文に見るように〈新東京〉の発展しつゝあるのは〈今日の光景〉であるとしている。ここには明治東京の歩みが巧みな比喩で表現されている。〈火事場〉という比喩がそれである。文明という火事が東京を焼き尽くしているイメージで捉えている。ここでも東京の都市空間を山の手と下町で区分して説明している。火事が済んでしまった柳橋一帯の下町に比べて、火事の勢いは山の手の外郭へまで広がり新開地にまで達しつゝある。明治40年を目前にしている明治東京における文明の大勢はもはや下町を過去に追いやっているという認識である。山の手に時代を担う勢いがあるという認識は田山花袋と同質の認識である。東京の都市空間における下町／山の手という区分された空間認識を使うことは共通していながら、藤村が強調しているのは〈物質的文明〉を言うのではなく〈時代の精神〉を言っていると補足を加えている。ここに藤村が文明を「物質的」側面ではなく「精神的」な側面で語っていることが注目される。

また、文学談では今日の下町の〈青年〉について言及しているが、『春』が青年グループの青春群像を描いている点を考えれば、執筆中に語られる下町の〈青年〉に向けられた視線は見逃せない。

前途に希望もあり、前進的でもならなければならぬ青年までが、何うやら老い込んで居る様に見える。だから此辺に住んで居るものは昔からの家業を其俣

保守的に固守し、僅かに旧態を維持するに止まつて進歩的な、なほ新たに何れの方面にか発展するなどの考へは毛頭なく、寧ろ退嬰的で、段々後ざり為て居る、まあ他へ移るにも移れず仕方が無いから居付いた、住み慣れた所に喰付いて居るより外策の施し様が無いと云つた風だらうと思ふのです。ですから時代の風潮が、世の大勢が何う変わらうと、一向関せず全然時代思潮と没交渉の有様で、極めてお目出度いものです¹²⁾。

引用文から〈青年〉は希望を持ち前進的で世の大勢を把握し、積極的に時代思潮との交渉を通して〈発展する〉べきだという藤村の認識が伺える。ところが、今日の下町は青年までもが老い込んでいる。〈家業〉を維持するだけの保守的で、時代思潮と没交渉で、新たな方面への発展は期待できず、退嬰的な姿である。〈「新東京」における文明の勢いの中、〈廃残の地〉と化している下町、そしてそこに住む出口のない青年の今日的有様を語っている。

2. 〈新しい世界〉の模索と限界

『春』と同年に発表された夏目漱石の『三四郎』は、熊本から汽車で上京する青年の物語である。この『三四郎』を意識して書かれたとされる森鷗外の『青年』（明治43年）の主人公は、文学を志し上京する青年の物語である。このように東京は、近代の中心地であり、青雲の志を掛ける場所であった。

『春』の青年達は地方から上京する青年ではなく、すでに東京を生活空間としている人物達である。ただ、一人中心人物の岸本捨吉は東京を〈出京〉して半年間も〈放浪〉する身である。東京で生活している友達と、東京を出ている捨吉という組み合わせから物語は展開し、『春』の冒頭の導入部分から47章の、ほぼ三分の一を占める前半が東京から距離を置いた箱根及び国府津という場所で構成されている¹³⁾。いずれも東京から至近距離で、東京を相対化して捉え、東京を問題的空间として立ち上げている。

物語は岸本を中心に東京の友達が箱根に集まり談義することから展開する。集まった4人は雑誌を出すという共同の仕事を目指していることから、文学、宗教、雑誌の仕事などの話がなされる。しかし、話の主軸は「恋愛」についての議論である。〈都会の人間〉を描くとする『春』の構成を鑑みれば、近代の中心である首都東京における明治20年代を生きる青年が直面している問題を、東京から離れた周辺空間を設定し、そこで「恋愛問題」を語ることで東京の問題的側面を浮上

させていることが分る。では、東京はどのような問題的側面を抱えているのか。

以下の引用文は、恋愛結婚をした青木、一番年下の市川、岸本、岸本の学窓である菅の「恋愛」をめぐる話である。

○青木：

二人の結婚は世にありふれたやうなものではなかつた。愛して、愛されて、すべての物を犠牲にして、それで漸く一緒に成つた仲である。47頁

○市川：

市川は嘆息して、『実は僕も、もうすこしで岸本君の後を追ふところだつたのです。』『君も左様いふ氣に成つたかねえ。』と青木は同情のある語氣で言つた。……中略……今一步——といふところで、僕は考へました。』5頁

○岸本：

身体と言はず、精神と言はず、彼は今萌えて出る木の芽のやうな自分の生氣に圧されて、胸の塞がるほど苦しい人である。彼は最早自分で自分を制へることの出来ない人である。たゞたゞ恐ろしい勢いで押出されて行く人である。71頁

家を出、職業を捨て、友達を離れて、半歳の余も諸国を流浪して来たといふことは、岸本が精神の内部をよく説明して居た。夫ほど彼は動揺して居た。7頁

○菅：

不思議な変化が其日から菅の精神の内部に起つて来た。……中略……彼の内部にあるものは総て一時に芽を出し始めた。新しい世界は眼前に展けて来た。28頁

不思議なことには、是程親しかつた家の人と菅との間が箱根以来急に變つて来た。32頁

恋愛結婚をした青木を先頭に、恋に〈馬車馬〉のように走り出した岸本、その〈後を追ふ〉ような状態になつた市川、そして〈平和〉であつた菅が、箱根の旅館女中に恋心を抱きはじめ〈不思議な変化〉を経験しつつある。すなわち恋愛を経由して結婚に到る順序とも言うべき段階をそれぞれが体現している状況の描写と言へる。特に菅の心は、恋を知らない〈平和〉な状態に〈変化〉が催される。これまでの〈平和〉な安定した世界が揺らぎ、〈新しい世界〉を開く鍵を手にしたよふ語り方である。青木は結婚に至り、岸本の現在は恋の勢いに〈押し流されて行く〉状況にある。青木を先頭に青木をなぞるよふ皆の恋の展開は、〈新しい世界〉の誕生を垣間見せる夢を提示すると同時に、いままでの〈平和〉な世界にヒビが入る出来事に重き

が置かれている。

青木は〈すべての物を犠牲〉にし、岸本は〈家を出、職業を捨て、友達を離れ〉放浪が続いている。菅は親密であつた叔母の家族との関係が変化する。つまり、恋愛の浮上はそれまでの〈平和〉な世界、人間関係が葛藤を伴う関係に変化し浮上してくる。恋愛という新しい世界はそれまでの〈平和〉な安定した世界、家族関係とは両立できない状況の示唆である¹⁴⁾。つまり、東京〈都会〉という空間が持つ問題的側面は、自由恋愛による〈新しい世界〉を開く可能性が、家族空間によって閉ざされる空間として表象されている。青木は〈世にありふれたもの〉ではない自由恋愛による結婚を、恋心を抱き押し流されている岸本は〈出京〉を、菅は恋心に目覚める瞬間を、それぞれが恋愛の段階を体現している。岸本の放浪の旅は恋愛を媒介に〈新しい世界〉に踏み込んだ者がとるべき最大の行為であり、仲間の共通の願望を代行していると言える¹⁵⁾。

作品の前半部において岸本の〈出京〉行為には、一つの答えが出ている。そこには、放浪の旅という日常の削除に新しい可能性を開く出口はなく、自殺へと突き進むしか道は残されていない。ここで岸本は、背負わされた〈束縛〉の世界から出ることは不可能であるという認識へ至つて〈『世の中』〉東京へ帰る。

〈新しい世界〉への進入が遮断される東京の「否定性」をもっともよく言い表したのは、つぎの青木の述懐である。

青木は真面目に成つて、沈痛慷慨な語氣でもあつて古い習慣と形式とに束縛された多くの思想を攻撃し始めた。彼は当時の似而非愛國者、自分で知らずに居る楽天家、他界の觀念に乏しい宗教家、それから浮世の英雄なぞを数へて、莊嚴な威容を備へた人間の爲ることも、多くの哀れむべく戯れに過ぎないと嘆息した。青木に言はせると、今の祖国は唯青年の墓である。何等の新しい生命を認めることが出来ない。何等の創意も無い。唯、浅墓な泰平の歌を聴くのみである。87頁

引用文には明治近代東京を牽引してきた〈愛國者〉〈宗教家〉〈英雄〉などの〈莊嚴な威容を備へた人間〉に対する批判を読むことができる。新しい時代に生まれた青年にとって〈当時〉は〈古い習慣と形式とに束縛された〉空間の形象が〈青年の墓〉の比喩によって言い表されている。当代の東京に向けられた墓場の表象には、明治近代化を歩んできた20年代の東京〈都会〉の「否定性」が込められている。

3. 東京〈都会〉の空間的特性

東京〈都会〉の持つ「否定性」=恋愛を許さない社会の〈束縛〉は、家族空間において問われる。『春』に登場する青年たちの住まいは、すべて下町である。岸本の『世の中』に帰る第一歩は、大川端の叔父の家である。岸本と恋の悩みを分け合うようになった学窓の昔も日本橋木挽町で、市川も日本橋本船町、雑誌の経営責任者の岡見兄弟も日本橋大伝馬町、そして青木の家は京橋銀座及び芝公園といったぐあいである。

高阪薫氏は『春』の都会小説的な側面について〈住居とか町々を転々とするだけで、所詮地理的な空間の移動〉に過ぎないと言及している¹⁶⁾。しかし、仲間の家が典型的な下町に偏在し、家の概略が表裏一体的に組み合わせられて描写されていることを合わせて考えて見る必要がある。市川の場合を具体的な例にして考察してみる。

○本船町：

その辺は紺暖簾の香のするやうなところで、蔵造の間屋が軒を並べて、店頭で荷造をするのと、荷車や荷馬車が往来を通るので、多忙しく混雑した眺めの町である。酒、砂糖、海苔、乾魚其他海産物の類が絶えず斯の町を運搬されて居る。菓の簞笥を担いだ商人も其間を通る。その簞笥の環の音を聞くと、最中定斉を売りに来る季節に成つたかといふことを思はせる。151-152頁

○市川と家：

すべて彼の風貌に顕われたところは、東京の下町で堅気な家庭で育つた人であるといふことを思はせる。彼の細い柔軟な眼は、大人のやうな思慮を表わして居て、若輩ながらに世上の人を睨むと言つたやうな風があつた。……中略……『なにしろ僕のところなどは事情の多い家庭で、姉と養子の折合は好くないし。』と市川は言ひかけて、暫時相手の顔を眺めて、『姉は又、何事も知らないものですから、一途に僕を頼りにしているんです。僕が旅にでも出たふものなら、後は奈何なるか知れない。今一步——といふところで、僕は考へました。』4-5頁

一つ目の引用文には〈紺暖簾〉〈蔵造の間屋〉が並ぶ本船町の葉種問屋の家の下町育ちであることが記される。二つ目の引用文から〈事情の多い家庭〉環境で、家に踏み止まった市川は、岸本のように、家を出るような、青木に言わせると〈破壊〉的な行為に移ることはない。菅の場合は、木挽町の下宿屋をやっている叔母の家族の描写からみると、恋心を抱くと同時に、家

族関係に変化を来すが、破綻はない。このようにして、町の描写と人物と家との関係が組み合わせられ、仲間の問題的な側面が描かれる。すなわち、当時の〈束縛〉を強いる世間が、京橋、日本橋周辺の下町の商家の範疇で構成されている。このことは、明治期を通して東京の経済の中心であり続けた日本橋の中心性が——藤村がそれを強く意識して書いたか否かは別としても——書き込まれている。下町は、青年の〈新しい世界〉を〈束縛〉する空間として召喚されている。

仲間〈連中〉の職業は女学校の教師であり共同で雑誌を出している。女学校は麴町で、下町と麴町を往復する行動半径にあるが、そこを詳細に描写することはない。仲間〈連中〉の〈新しい世界〉への可能性を秘めた場所として想定されるのが、つぎの引用文に見るように本郷の〈池の端〉である。

○菅の下宿：

池の端にある菅の下宿へはよく連中が押掛けて行つた。是は菅の慇懃なのと、宿の気楽なのと、丁度集まるに具合の好い位置にあつたからで。そこへ行くと誰かしら来て居る、又やつて来る、といふ風であつたから、自然と会合の場所のやうに成つた。108頁

○池の端：

屋敷跡とも言ひさうな古い庭に囲まれた家で、片隅に菅の借りて居る部屋がある。間取の具合も都合よく出来て居る。外に下宿する人の声も聞えない。窓によせて菅の机が置いてあつて、其障子の開いたところから、不忍の池に近い空も見える。72頁

仲間〈連中〉は東京で会合を重ねるが、そのもっとも適した場所は、本郷の〈池の端〉の菅の下宿であった。菅はなぜ下町の木挽町から、本郷の〈池の端〉へ移動したのか。菅は叔母の〈女の多い一族〉の中で〈頼母しく思われて居た〉男の一人であったが、箱根の恋愛問題以来、家族関係に溝が生じ、そこから距離を置くことにあつた。市川も、本船町の家から〈池の端〉の菅の下宿の方へ移っている。菅は教師として本郷の池の端から麴町の女学校へ、市川は学生として高等学校へ通う。本郷〈池の端〉は、かつての支配階級の屋敷跡であり¹⁷⁾、新しい時勢に入るための可能性を秘めている場所であり、仲間にとって下町の家族空間から距離を確保しつつ〈新しい世界〉の可能性を模索し得る拠点に成りえた。ところが、仲間〈連中〉は〈池の端〉で乖離する¹⁸⁾。菅、市川をはじめ〈連中〉は、東京大学へと明治の出世コースに乗る。対蹠的に、青木・岸本は家族空間に絡めとられ〈池の端〉の拠点

世界〉の追求の不可能性が示される。岸本は故郷から上京した家族の扶養責任を背負い、仲間〈連中〉と離れて行く。それは、〈自分の道〉という価値追求の方法であったが、東北行きが示すごとく、岸本は家族との両立はできず、〈自分の道〉を選び、家族を切り捨て、東京の空間から離れる。家族空間から出た仲間の拠点とされた本郷〈池の端〉は、下町・商家・実社会に代わり得る〈新しい世界〉の構築への移行を示唆している。下町から本郷への歩みの背景には、当時の東京の都市空間の力学が作用している。下町の商家が実社会を代弁しており、本郷は、新しい明治の出世コースとなる¹⁹⁾。

『春』では、当時の東京の新しい——〈ペンキ塗りの家、煉瓦造り、昔風の日本造りなど、物質的の革命〉など——様相を、都市描写の外面的風景に重点を置くのではなく、下町／山の手に潜む精神的空間として取り込んでいる。

4. 家族的人間の断層

東京〈都会〉を生きる〈人間〉の様相は、仲間〈連中〉の恋愛問題を中心軸に家族空間の葛藤を通して把握されている。青年仲間の恋愛問題は、明治20年代の社会規範からすれば、必然的に家族との軋轢が横たわり、家システムを基盤にした社会構造の問題性が浮き彫りになっている。また、明治の物質的文明化が進む状況において、恋愛は近代人間の精神的側面を測る構図である。この構図において、仲間の恋愛の最大公約数は、菅の恋に見られる。引用文の友人足立が菅の叔母に送った手紙から〈今日主義の道德〉を土台にした、恋愛そのものを容認しない社会を〈束縛〉と受け止める彼らの認識が伺える。

A 儒教的的思想あれば、恋といふ事の眞の味をば解し給はぬさまなり。

B 当世の淑女方のみこゝろに叶はざるべし。

C 物堅き御身には、何事も皆浮れたる心の筋と見給ふも理ならずとはし難けれど……

D 君は一時の情に過ぎねば、世間並に時日を経過せば、容易く冷却すべしと言へど……

a 恋とは他性の内部に己を見出すことにして、人間の眞価は此内部の人の如何によりて定まるべき……

b されど人間の眞価は外面のみにては判じ難からむ。人間の位も、学も、財も、衣服も、容姿の美も、みな擲ちて残るもの……純の純なる物こそ、眞の内部の人間なれと思ふなり。

c 人間の霊火は瞬時に発し、瞬時にして滅するものなり。……中略……かへりて貴からめ。

d 時を経、日を過す程に、今は全く精神全体の働きとなり……中略……彼の心の動き難きを信ずれば、今更実験の必要を認めず。140-141頁

引用文は恋と対立する観念として〈儒教的〉価値観を取り上げている。大文字アルファベットの項目の部分は叔母の道德認識を描いており、それは〈儒教的〉思想から人間の〈外面〉を重んじ、小文字アルファベットの項目に見られるような人間の価値を〈内部〉に置いた恋を理解することは難しい。さらに恋愛は人間の〈精神全体の働き〉であり、それを止めることは〈精神的に殺害〉するに等しいと述べている。つまり、足立の批判の射程は儒教的人間像であり、恋愛を媒介にした新しい近代の人間像を提示して、叔母世代と菅世代の人間観の根本的な断層を見せている。この断層をもっとも体現した人物が青木である。青木は当代の社会構造の中で、青年が抱える矛盾を内部的に展開した様相を見せる。

青木が〈生と来歴〉を綴って妻に送った手紙では、自己の〈内部〉矛盾をどのように見ているか、自分をどのように理解しているか、などという自画像を知ることができる。手紙の内容から注目すべきは青木と母の関係である。母の顕著な特徴として〈功名心〉を上げ、母の〈功名心〉に躍らされた自分の姿から、母を〈看守人〉と記述している。ここには、儒教的道德に根を持った母の〈功名心〉によって、自分の〈天性〉が損なわれたという認識が見られる。〈功名心〉という儒教的世界観から自由恋愛という行為により自分を切り出し〈新しい世界〉〈自己の独立〉を目指したものの、母に、妻に〈監視〉されるなかの青木の自殺が物語るように、断層に引き裂かれたまま解決の出口は見出せない。このことは、青木の言う〈不調和な社会〉は〈青年の墓〉であるということ、青木自身がそれを体現した形で敗北に帰することによって描かれる。

岸本の恋の行方は、青年男女の将来が、すでに親(社会)によって〈運命〉が定められている〈許婚〉という問題として集約的に現われている。岸本の〈許婚〉のいる勝子への恋は、社会的〈タブーを犯す〉出来事であり²⁰⁾、〈新しい思想〉の萌芽としてのこの恋は諦める方向へと収斂していく。それと引き換えに、岸本は実家の家族のしがらみを引き受ける。

一家の経済的責任を引き受けた岸本において描かれるのは、家族の扶養という〈生活の重荷〉である。その後の岸本の姿は家族を引き受けながら、その中に居て〈自分の道〉——空間的には本郷に執着——を見出

そうとする者の姿である。青木にとって家族空間が〈牢獄〉として表象されているのと同様に、岸本においても家族を引き受けることの代償は〈新しい世界〉から遠のくことであった。青木とは対蹠的に、家族を引き受けた岸本においても、〈自己〉〈自分〉の領域を確保することは不可能であった。青木は死の道を選んだが、岸本は家族から自分を引き離し東北へと落ちていく。

新しい世界を目指して共同の仕事、問題意識を共有してきた仲間は、その方法において乖離していく。明治20年代を生きる青年像が仲間と岸本とに分離していく。そのもっとも象徴的な場面を引用文から見ることができる。

岸本は他の友達に置いて行かれるやうな気がした。皆な自分のやうに愚図々々しては居ないと思つた。それでも、以前と同じやうな心地に返りたいと思つて、話頭を恋愛の問題へ向けて見る。菅は、最早其様な話に飽き飽きしたといふ風であつた。『まだラブの話か。』と彼は面を擡めた。『ラブなんてものは、其様に大騒ぎする程のものぢやないんだネ——畢竟、飯を食ふやうなものサ。』……中略……その岸本の姿を眺めると、菅は空想家の末路を見るやうな思がした。201頁

菅の〈池の端〉での最後の会合の場面である。家族を引き受けながら〈自分〉を模索している岸本は仲間と齟齬しているように感じる。岸本は話題を〈恋愛の問題へ向けて見る〉。儒教的人間観を批判し、新しい人間像を提示する拠点としての恋愛問題は、引用文にみるように、〈まだラブの話か〉と、もう相手にされないばかりでなく〈飯を食うやうなもの〉と言われ、〈新しい世界〉を切り開く精神性は問われず、〈空想〉の世界として彼方へ押し遣られる。

仲間は下町から池の端の下宿を中間拠点に、大学＝近代へつながる選択をしている。ここには青木の言う〈不調和な社会〉の追求を回避して、時代の成功者へ昇りつめる青年の姿があり、〈不調和な社会〉の問題を露にする精神性の追求は浮いたままである。岸本が見届けた東京の家族・仲間を通して見出したのは、明治20年代の近代の精神性の挫折、〈自己の独立〉〈自分の道〉が分解する姿であった。

岸本の選択は家族に見切りをつけること、そのことは再び東京から〈出京〉する道である。さらに、示唆的なのは、東北行きである。東京が立身出世の夢への道であるとすれば、東北は夢に破れた者が落ち延びる場所となっている。さらに、東京からは失敗者の空間

に加えて、〈空想〉の世界である〈自分〉を抱き、開拓へ向かう場所として東北の存在意義はある。

ここで、成功への道に乗った仲間が根っからの下町っ子であるのに対して、自殺した青木、〈出京〉した岸本の二人は地方からの上京者であることを再考察してみる必要があると思われる。

おわりに

『春』に描かれる東京の、つまり〈都会の人間〉は、明治20年代を生きる、それぞれの家族空間に代表される〈封建制度の下〉の〈儒教的〉世代に対し、明治維新後生まれのこれからの近代化を担う若い世代との断層を見せることから始まる。この両世代の世界観の相違を恋愛問題を拠点に浮き彫りにしている。人間の〈内部〉への注目は、それまでの儒教的世界観を批判する新しい世界観の基盤の提示となっている。つぎに〈世の中〉の縮図である家族の世界を問い直すことで、若い仲間の内部の差異の問題へと移行している。そこでは〈新しい世界〉が二つに乖離する。近代人間の精神性を追求し、限界を露呈する青木的な歩みを、〈空想〉として見切りをつける仲間に対し、家族から出る、仲間から出る、東京から出る、すべてを切り捨て〈空想〉に拘ること自分の〈新しい世界〉を充楨しようとする岸本である。

このような家族空間の相対化は、文明化の道を歩み続けてきた近代の中心、東京を相対化する構図となっている。本郷の武家屋敷跡に建立される帝国大学、その周辺に書生が群がり、本郷が新たな中心空間として浮上してくる。この明治20年代的時勢に、仲間〈連中〉は、下町の家族の経済的な支えにより〈池の端〉を拠点に、本郷の新たな時勢の中へ参入していく。明治近代の平等の精神を勝ち取るための〈学問〉を通して新エリートの仲間入りを果たすという明治近代の構図は、本郷が担う世界である。青木の自殺、岸本の出京は、東京が歩んできた、また歩んでいく近代文明社会の方向性とは相容れない〈空想〉の世界である。一方、下町仲間は本郷を経由し、山の手世界へつながり、以後の明治帝国主義国家を支える基盤となっていく。

明治の文明化が日清・日露戦後にまたがって帝国主義的傾向を強めるなか、岸本が家族、仲間から離れ、再び東京という中心から内地植民地とも言える東北へと〈出京〉し離れていく結末は、東京が体現しつつある明治近代の「権力」と「物質文明」に対する島崎藤村の懐疑的姿勢と読むことができる。

○テキストは『島崎藤村全集』3巻、6巻、9巻、筑摩書房、昭和42年を用いた。本文引用において旧漢字は当用漢字に変えている。なお、本全集第3巻を用いる場合、引用文のあとに頁数のみを記した。

【注】

- 1) 出原隆俊「『春』の背景——『透谷全集』と風葉「青春」」『島崎藤村研究』30号、島崎藤村研究会、2002年9月、27頁
- 2) 滝藤満義「シンポジウム発第：島崎藤村『春』をめぐって——『春』創作における方法上の諸問題」『国文学解釈と鑑賞』1996年8月、155頁
- 3) 藪禎子「藤村と東京」『藤女子大学国文学雑誌』50号、1993年3月、52-56頁
- 4) 島崎藤村「『春』と「龍土会」」『趣味』明治40年4月号（引用は『島崎藤村全集』6巻、503頁による）
- 5) 藪禎子、前掲論文、58頁
- 6) 田山花袋「東京の発展」『東京の三十年』博文館、1917年7月（引用は『東京の三十年』岩波書店、1981年8月、261-264頁による）
- 7) 同書、72頁
- 8) 杉浦章介「戦前期東京「山の手」における階層分化と地域文化」（「紳士録」データによる「上からの中流化」過程の分析）『慶応義塾大学日吉紀要』1993年3月、5-6頁、28-29頁
- 9) 島崎藤村「小山内薫氏の印象」『新潮』大正7年11月号（引用は『島崎藤村全集』9巻、486-488頁による）
- 10) 島崎藤村「文学談」『読売新聞』明治39年10月22日（引用は『島崎藤村全集』9巻、493-494頁による）
- 11) 島崎藤村「寒き口唇」『読売新聞』明治39年10月27日（引用は『島崎藤村全集』9巻、495-496頁による）
- 12) 島崎藤村「文学談」前掲書、494頁
- 13) 十川信介「『春』の意図」『島崎藤村』筑摩書房、1980年11月（初出『文学』1970年5月）、91頁で『春』は「旅」にはさまれた東京周辺の生活に期間と場所が限定されていると指摘している。
- 14) 畑有三「早すぎた青春」『国文学解釈と鑑賞』1979年4月、77頁で恋愛そのものを容認しない社会の「束縛」の力が、彼らの恋を絶望的に感じさせていたと指摘している。
- 15) 滝藤満義、前掲論文、164頁参照
- 16) 高阪薫「シンポジウム発第：島崎藤村『春』をめぐって——「春」構想の作品化にみる二、三の問題（場と空間の変容）」『国文学解釈と鑑賞』1996年8月、147頁
- 17) 鈴木博之著『日本の近代10都市へ』中央公論新社1999年2月、175-176頁で明治10年末から〈本郷周辺の武家屋敷跡が借家の運営に手を出している〉という。
- 18) 高阪薫、前掲論文、146頁では〈離反〉していくという指摘がある。
- 19) 高橋昌子「『破戒』と『春』の間」『国語と国文学』1979年7月号、58頁では芸術家として〈劣等意識〉が重ねられていると指摘している。
- 20) 下山嬢子「『春』——勝子の〈恋愛〉」『国文学解釈と鑑賞』2002年10月、112頁

（主任指導教官 水島裕雅）